確かに周りにある足はぐるぐると回転しているが、ライオンの頭は回転していなかった。
『だろう？』
「うん。確かに回転していないね。右に行ったり左に行ったりはできるの？」
『不可能ではないぞ？狭いところを歩くのは苦手だがこれだけ広い場所ならすいすいだ』
「へー・・・なんだか本当にブエルって車のタイヤみたいだね」
ブエルはぴょんとソファーの上に乗るとウタの隣でうたた寝を始めた。
ブエルは伏せてうたた寝をするのだが、全ての足をたたんで眠るその様子がなんとなく猫のようだとウタは思っていた。
ウタとブエルの出会いは5年ほど前にさかのぼる。
当時開業したばかりだったウタは今と同じように昼休みを過ごしていた。
読書をしながらうとうとしていたら、突然体の上に衝撃を感じて目覚めた。

『おいお前。私と一緒に生活をしろ』
頭の中に響く声の主が、目の前にいる小さなライオン頭だと分かるのに少しの時間を要した。
（なんでキーホルダーがしゃべっているんだろう？）
ウタは一瞬自分も患者たちのように精神疾患になってしまったのかと思った。
とりあえず目の前にあるライオン頭をつまんでみた。
『何をする！』
起き上がってよく見ると、じたばたと動いているライオン頭は確実に生物だ。
『私はお前たちの世界でソロモン72柱の悪魔と言われているブエルだぞ！こんな無礼なことをしてただで済むと思うのか！？』
「ブエル？」
ウタはブエルをソファーの上に置くとスマホでブエルの名前を検索。
ネット上の情報では、確かに相手がブエルとしての特徴を持っているのを示していた。

「・・・悪魔ってマジでいるんだ」
ウタはブエルを手の平に乗せるとまじまじとながめた。
医療関係者としてのクセなのか、つい観察したい欲望が頭をもたげてくる。